

プロジェクト方式による「図解・新エネルギーのすべて」の出版

SCE・Net エネルギー研究会 松村 眞 : m.matsumura@aurora.ocn.ne.jp

SCE・Net（シニア・ケミカルエンジニアズ・ネットワーク）は、主に現役を退いた化学系の技術者を中心とする組織である。目的は実務経験を通じて蓄積した知見を、企業向けの技術支援、教育活動、調査研究に活用して、リタイア後も社会に貢献することにある。組織は2000年4月に発足したが、半年後にはエネルギー、環境、安全などの研究会を作り、分野ごとの活動の母体組織とした。本報告はエネルギー研究会が2004年に初版を出版し、2009年には改訂版を刊行した新エネルギーに関する図書の作成方法と要点である。2003年の時点では、太陽電池や風力発電など自然エネルギーの展望が不明確で、燃料電池など化石燃料の新利用形態も不透明だった。このため、技術系図書の出版社である工業調査会が、われわれに「図解・新エネルギーのすべて」と題する技術解説書を書けないか打診してきた。SCE・Netの会員の多くは、技術誌に解説記事などは書いたことがあるが、単行本を刊行した経験がない。このため書けるかどうか不安があったが、意義のある出版と考えて引き受けることにした。

「図解・新エネルギーのすべて」の要求事項

出版社からの本書に関する要請は、「新エネルギー」のすべてを含むこと、一般市民にも理解できる平易な記述に留意すること、目次構成は1項目4ページを基本とし、項目単位で自己完結させること、図表に約半分のスペースを割くことなどであった。困難な課題の一つは、新エネルギーの「すべて」を書くことにあった。著者の得意な分野だけを書くのではなく、知らないことも書かなければならなくなったのである。もう一つの課題は、一般市民向けの平易な記述が求められた点にある。われわれは専門雑誌に技術解説は書いてきたが、一般向けの執筆経験が乏しい。広い読者層に読んでもらうには、用語の選択だけでなく文章の書き方まで慎重な配慮が求められた。この二つの課題は、市販の単行本と専門誌が大きく異なる点であろう。また、適切な販売のタイミングから出版予定期日が決められ、遅延させるわけにはいかなかった。このような出版社の要請を守り、得意分野の異なる著者グループが一つの図書を完成させるには、チームとしてのマネジメントが必要である。共著はチーム仕事であり、個人仕事の単独出版とは進め方が違うことに留意する必要があった。そこでプラントのプロジェクトに似た遂行方法とマネジメント方式を採用した。

基本設計

共著で欠落と重複を避けるには、各著者が分担執筆

する内容を、かなり細かく規定する必要がある。そこで最初に約80項目の目次を決めるだけでなく、各目次項目で記載する細項目も1項目について3から5個設定した。次に執筆者を決めるのだが、それぞれに得意項目と不得意な項目がある。そこで全著者に得意な項目と、「得意ではないが書けなくはない」項目を選んでもらったが、誰も担当したくない項目が少なからず残ってしまった。「すべて」を書く共著では避けられない課題で、最終的には割り当てが必要になった。

工程管理と品質管理

出版期日を守るには工程管理も必要である。そこで全項目を網羅する工程表を作り、毎月の定例会議で全著者が自分の進捗状況を報告するようにした。この方法で遅延や変更に対処し、出版予定を守ることができた。品質管理の方法としては、カテゴリごとに2名のレビュアーを指名し、厳密な査読を実施した。レビュアーには、査読項目に詳しくない著者を当て、それでも容易に理解できるまで修正した。

情報の共有

チーム仕事であるから、情報の共有による意思の疎通と合意形成が欠かせない。そこでレンタルサーバーを利用し、目次項目と細項目、ページ数と著者、執筆要領、工程表、脱稿した原稿をアップロードした。他の著者の原稿を常時閲覧できる仕組みは、図書全体としての一貫性と整合性の確保に大きく役立った。共著の作成には非常に有効な手段である。

納入引き渡し

全原稿の仕上げと出版社への引き渡しは、プラントなら試運転と検収に該当する。この段階ではプロマネに相当する総括責任者が全文を厳密に査読し、残っていたミス表記や誤記述を修正するとともに、最終的な校正作業を行った。とくに注意したのは用語の統一である。著者が違えば同じ内容を違う言葉で表現することが多いからで、個人出版なら問題にならない共著固有の課題である。

共著のニーズとプロジェクト方式の必要性

技術が進化して知識の量が増えた結果、専門家は広さと深さを同時には提供できなくなっている。このため自分の専門領域を特化し、それ以外の領域は他の専門家に委ねるようになった。一方、読者は広さと深さを同時に求める。したがって、今後は得意分野の異なる複数著者による共著の必要性が高くなるであろう。本稿で報告したプロジェクト方式によるマネジメントは、共著の執筆と出版に必須と考えている。（おわり）